



母飢人

成熟道

臣歲登

海內皆

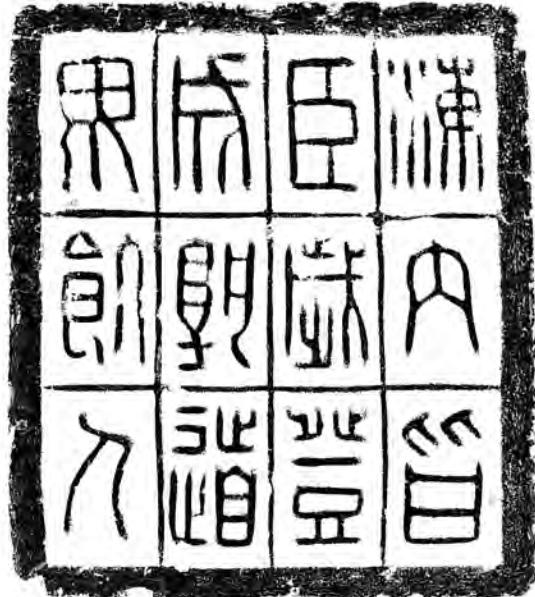
「秦漢時代の瓦当と磚文」

⑪ 「海内皆臣」 磚

図版②-2 図版②の拓本と同系の原磚



図版② 同文磚



図版③ 同文磚



縦が三十二センチあまり、やや縦長の長方形の磚、界線で区切られ四行、一行当たり三字が刻されている。文は、「海内皆臣、歲登成熟、道毋飢人」とあり、四字句で「世界は、全てが我が臣下であり、毎年穀物が豊作であり、道に飢える人が無いように」と、國家が安定し、豊かで、民の衣食が満つ事を述べた吉祥句であろう。この磚の出土は、それほど多くはない。書体は、篆書である。右頁の主図版の磚文は、やや縦長の平面に直線を強調するような筆勢である。終筆を筆を抜くように、やや細くしている。柳の葉のような字画（柳葉篆）の縦画が目につく。そのためか篆書であるが、伸びやかな趣を見る事ができる。左頁の同文磚の図②もほぼ同系の書風であるが、少しおっとりした筆勢である。図②の拓本と同系の原磚の写真（図②-2）を付した。また図③は、同文磚であるが、中の区切りの界線はなく、書体は篆書で文字構成もほぼ同じであるが、主図版の様な柳葉篆のような筆勢ではない。

伊藤滋（書斎名・木鷄室）

書道芸術院

平成の群像 (2017)



第69回毎日書道展 出品作品

小池蹊舟



「未完」の楽しみ

の旅も大変貴重な経験となりました。

扇舟先生」き後は、現理事長の辻元大雲

先生の下で、明清時代の書や、木簡等新たな分野での勉強もさせて頂いております。

書道芸術院第6代会長の種谷扇舟先生の奥様である城南先生に小学校1年生の時、

今回の掲載作品は、今年の第69回毎日書道展出品作です。

お習字の手ほどきを受けて以来、ご子息の萬城先生を含め、扇舟先生ご一家とのご縁

が、何と65年以

上も続いており

ます。

扇舟先生には、

県立千葉高校の

書道部でご指導

を受けて以来、

綿密なカリキュ

ラムに基づいて、

中国や日本の古

典を始め、時空

を超えた極野の

広い勉強をさせ

て頂きました。

北京・曲阜・

上海・西安・龍門・杭州・桂林

等中国への研修

今後共よろしくお願ひ致します。

ギーにして、かつ楽しみながら今後も書作

を続けていきたいと思つております。

のかも知れません。その「未完」をエネル

吉に、かつ楽しみながら今後も書作

を続けていきたいと思つております。

小池蹊舟書

「夢にも味覚母さんの鰐大根」

詩句の中に「母」という字が入っていると不思議と力が入ります。

「十億の人に十億の母あらむもわが母にまさる母ありなむや」と言われるようになります。

誰にとっても母親の存在は大きなものと感じております。

そんな母親の大きな存在に思いを馳せ、虚空から紙面に切り込む厳しい線、深くて重い慈悲深い線、躍动感のある生き生きとした線等を織り込んで書作してみました。

作品には、毎回「悔い」が残ります。しかし、それが次回への書作の原動力となるのですから、それも良いのかも知れません。

全てに納得の行く作品は望んでも無理な

のかも知れません。その「未完」をエネル

吉にして、かつ楽しみながら今後も書作

を続けていきたいと思つております。

今後共よろしくお願ひ致します。

ギーにして、かつ楽しみながら今後も書作

を続けていきたいと思つております。

のかも知れません。その「未完」をエネル

吉にして、かつ楽しみながら今後も書作

を続けていきたいと思つております。

今後共よろしくお願ひ致します。

書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

書道芸術院秋季展

書道芸術院創立70周年記念 役員作品巡回展・東京総局展 開催

2月開催の本展が春の総合展とするなら、秋の企画展として秋季展は継続開催されてきた。本年は10月3日より8日まで、東京セントラルミュージアム銀座にて創立70周年記念役員作品巡回展と東京総局展が2階のフェニックスホールにて併催され、例年になく盛況に開催された。また秋季展の企画展としてアートサロン毎日を会場に5名の精鋭作家による推薦作家展も同時開催された。

秋季展は財団役員（顧問・理事・監事・評議員・参事）および2月の本展春華賞選考にて最終ノミネートされた本院審査会員より選抜されたもの、および推薦作家5名は毎日書道展審査会員を除く中から漢字部・谷田熾箋、かな部・九條純代、現代詩文書部・浅利祥紫、篆刻刻字部・市川公山、前衛書部・後藤法明の各氏が一人7mの壁面に大作、組作品で挑戦した。

更に審査会員候補公募300名より選考された秋季菊花賞11名、秋季俊英賞39名、計50名の作品も秋季展会場に展示発表された。秋季菊花賞、俊英賞は本展での入賞経歴と合算され審査会員昇格の得点として記録される。

会場は天井が大きく改装され最初はやや違和感があったが見慣れてくるとさほどでもなかった。毎日展公募作品サイズが主力で（顧問・名誉会員・参与会員は半切）、やや窮屈な陳列となつたと思う。

2階の役員作品巡回展および東京総局展はやや小ぶりな作品であったが、特設した壁面にすつきりと展示され落ち着いた会場となつた。巡回展はあと山陰支局展（倉吉）を残すのみとなつた。



秋季展祝賀会風景

初日3日には秋季菊花賞・俊英賞の表彰式、推薦作家および秋季菊花賞入賞者による作品研究会が近くの銀座會議室を会場として選考委員の助言などを含め充実した催しとして開催された。その後夕刻より銀座東武ホテルにて80名余のご来賓をお招きし、東京総局展関係者を含め盛大に祝賀懇親会が行われた。

推薦作家展では2日の陳列日夕刻より会場内にて出品者を用んで毎日新聞社、書道会役員、院主要役員などが参加して和やかに行われた。

創立70周年記念ウイーン展開催

10年ぶりの開催となった海外展は院創立70周年記念事業の主要企画として

実施され、10月18日より25日までウイン市内ヘルナルス市民大学を会場として開催された。展示作品は財団役員（顧問・理事監事・評議員・参事）50点のほかウイーン訪問団に参加された本院審査会員19名の作品合わせ69点が展示された。同時に開催された日本大使館付属の日本広報文化センターでの「第20回国際交流ウイーン書道展」と併せ、充実盛況に開催された。

市民大学会場では全作品が展示でき

ず、一部作品は日本広報文化センターの1室をお借りして展示発表した。

「国際交流ウイーン展」は四国支局の本院参与会員谷脇梅翠先生のご努力で継続開催されて今回で20回目の大きな節目を迎えた。先生のウイーンでの活動は33年の長きにおよび、そのご功績ご苦勞は計り知れないものがある。先生は90歳のご高齢を迎えられ、この活動は今回展を区切りとされるご意向を表明されている。来年以降は院主催として継続していく予定で理事会にお諮りして決定する。

17日より訪問団（前期49名、後期10名、添乗員4名）がウイーン市に集結。作品は半切／大を軸装、額装にて藤和包装に一括依頼し、安藤社長には展示



ウイーン展ワークショップ風景

作業などのためご同行を願った。毎日書道会顧問室賀靖夫氏、書道評論家麻生泰久氏には前期、毎日新聞学芸部桐山正寿氏には後期日程でご同行願い、種々ご教導を賜った。作品集は匠出版に依頼、作品・作品集など全て前期訪問団が分散して託送荷物として現地に持ち込んだ。

18日午前からの展示は本部役員が担当、更に午後3時からのウイーン市民対象のワークショップ（書道教室）開催、2教室に分かれて5時過ぎまで楽しくにぎやかに開催した。下谷洋子、小竹石雲、板垣洞仙、前田龍雲、川島舟錦と辻元が指導した。訪問団員にもご協力いただき感謝。後期は25日に児童対象に開催。辻元・下谷のほか後藤大峰、千葉蒼玄、太田蓮紅、熊谷宗宛などが指導。

6時から開幕レセプション、更に5名の代表者による席上揮毫もご披露した。（川島・前田・松村くに子・大平垣）大学校長、日本小井沼紀芳大使などご来賓の喝采を浴びた。

以下別掲の報告をご覧ください。

漢字(二)

小伏小扇



小伏小扇刻

甲骨文の書表現(二)

甲骨文は「ト占」に使われた文字です。ト占は、いかに重要な事柄であれ、それは全く一過性のもので、その内容を記録してまで後世に伝えるような必要性は考えられないことです。それがなぜ、わざわざト占の目的や吉凶を文字として刻されたのでしょうか。

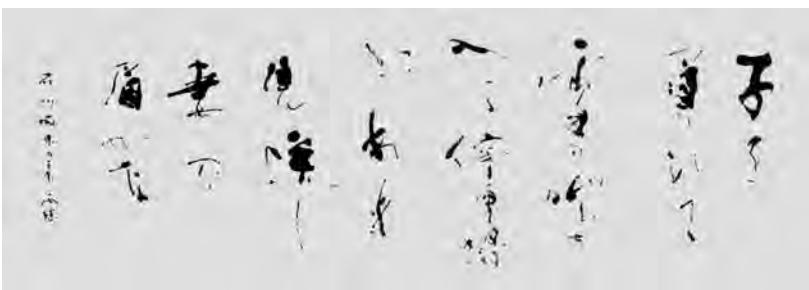
いたのは神の託宣をうけて地上を統治した王が、自らの権威を明らかにし、王の神聖なる地位を護持するためのものであり、文字は人と神の橋渡しをする神聖なものであった」と述べられています。文字は神聖なもので、今日的な單に言語の記録のための符号などのことについて阿辻哲次(京都大学教授)は「…その記録が保存されて

いたのは神の託宣をうけて地上を統治した王が、自らの権威を明らかにし、王の神聖なる地位を護持するためのものであり、文字は人と神の橋渡しをする神聖なものであった」と述べられています。文字は神聖なもので、今日的な單に言語の記録のための符号などのことについて阿辻哲次(京都大学教授)は「…その記録が保存されて

(二)「十日所視」(20×20)

甲骨に刻されている文字ですが、一画を一刀で刻しています。その刻した文字をみると、かなり練達の士であったことは明白です。これらを細かく観察するうち、止むに止まれぬ必要性を感じ、本格的に篆刻を学びはじめました。

21世紀の書 —私の主張—



第66回書道芸術院展出品「一握の砂」

西岡雨瑠書

現代詩文書(二)

西岡雨瑠

一期一会―師との邂逅とは
毎日展初出品は、昭和57年第34回展である。高村光太郎の詩を選び、無我夢中で筆をとった。

紙に遊ばれ、墨につき離され、制作の主題となる動機も不確実。手本という確実な味方さえも不透明となる。早や、後悔のスタート。書くこと、まねることを、素直に受け入れがたい我身に唾然とした。指導者・齊藤雨城先生は、どれほど御苦労された事かと想像する。今まで不思議だと言わざるを得ない。ある時、詩文が我身に伝わる。紙面に向かう心が動く、物真似や物覚えなどで書くことではない。自己表現を創作することは、生きた学問と理論が大切と知らされた。感動と感情を広げることが制作の喜びにつながればよい。師匠は弟子を決して叱らない。褒めて、制作の喜びを味わう時間を与えて下さった。先生の門を叩いてから、5年目に初出品、初入選を果たし現代詩文書の世界へ旅立つ。掲載の作品は第66回書道芸術院展出品作。石川啄木が小樽の街に住み、うたった歌である。北国の情景が、湧きまくつてくる。悲しみと、生きる明日への力を背負う家族への愛。墨量の変化が感情の糸口につながればいいと思う。

平成29年度 新審査会員作品

II

諸富玖扇（漢）・高橋賢雲（漢）・島本秀代（か）・高橋四蓮（現）



諸富玖扇
(大阪)



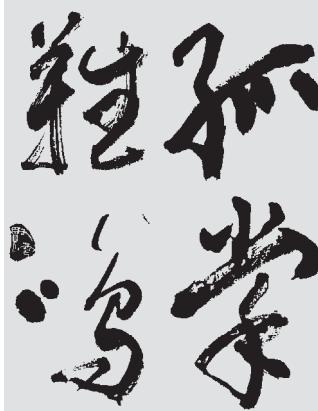
「愉」

師、小伏竹村・小扇先生との出会いは、“知識や教養、心の貯金は一度には無理”と言ふ叔母の誘いからでした。「愉」は、心が和らぎ、明るか、楽しむ。気持ちよい線を求めて日々精進して参ります。

(玖扇)



高橋賢雲
(千葉)



「孤掌難鳴」

30余年前、カルチャーで種谷扇舟先生と出会い、書が楽しくなりました。お習字の域をぬけられぬ私をご指導いただきました最首翠風先生はじめ白扇書道会の先生方に、感謝申し上げます。初心にかえり、古典の臨書に励みたいと思います。(賢雲)



島本秀代
(神奈川)



諸富玖扇
(大阪)



「雷のあと」

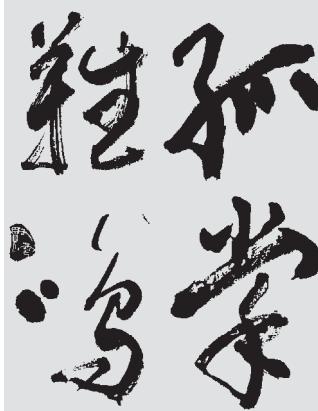
「雷のあと」

これまでご指導頂いた多くの先生方に感謝申上げます。情緒豊かな仮名の世界に、長くひたって居ります。臨書している時ふと古人の息使いを感じわくわくします。これから私はどんな字を残そうかと思ひます。今夏の雷は忘れられません。

(秀代)



高橋四蓮
(宮城)



高橋四蓮
(現)



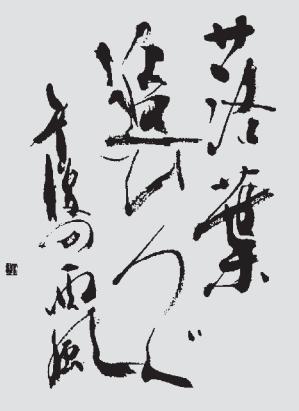
高橋四蓮
(現)



「落葉追ひつゞ 午後の西風」

「落葉追ひつゞ 午後の西風」

「落葉追ひつゞ 午後の西風」



以前、短歌会に籍をおき、詠みためた短歌を思ひたつて書作しております。今回はその中の歌の一部を書いてみました。これからも歌や詩の息づかいが感じられるような現代詩の作品を目指し書作を続けたいと考えております。この度審査会員の資格をいただき心から感謝いたしております。

(四蓮)

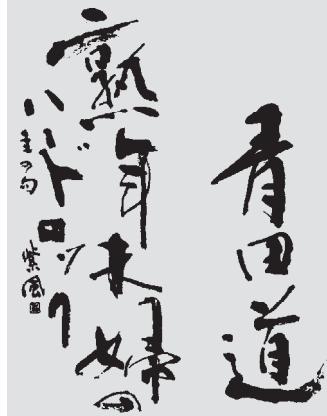
平成29年度 新審査会員作品

古谷紫風（現）・本郷清浩（現）・柿本紀子（現）・岩上郁子（前）



古谷紫風
(山口)

「圭の句」



今回の作品は書友の句です。

青い稻とおふたりの生き生
きとした光景が素敵だと思
いました。自分の思いを伝える
ことは、とても難しいことで
す。これからも精進し、一步
一步前に進みたいと思います。
師である長富東霞先生・山
田梓江先生、諸先生方、書友
の皆様に感謝申し上げます。

（紫風）



柿本紀子
(福井)

「待宵草」
弓削紗子

大地に根を張る様に、どっしりとし
た重厚な書にあこがれながら、なかなか
か果せません。夢は、いつの日か、叶
うのでしょうか。

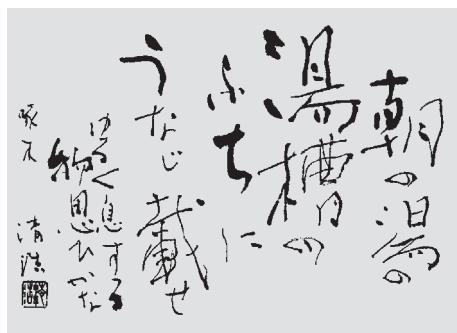
先生、社中の皆様から背中をおされ
ながら、夢に向いたいと願っています。
(紀子)



岩上郁子
(埼玉)

「生命」

この度は、審査会員にご推
挙いただきありがとうございました。「ござい
ました。師の真下京子先生の
線を切つたら血がほとばし
るような線を引きなさい。」
という言葉が強く心に残り、
常にそうありたいと思い作品
を書いております。
今後、さらにオンライン一
を産みだすよう研鑽してまい
りたいと思います。
(郁子)



「朝の湯の…」 石川啄木句

青春とは、「心の有り様である。年
齢を重ねて老いるのではなく、情熱を
失ったときは老いる」という。

73歳。今が青春と、情熱を失うこ
となく書に向き合っていきます。
苦い青春時代のひとコマを思い浮か
べ揮毫しました。

（清浩）



本郷清浩
(宮城)

「朝の湯の…」 石川啄木句

平成29年度 新審査会員作品

門脇信子（前）・中村雅臣（前）・三木彩月（前）

門脇信子
(群馬)

「精」



三木彩月
(群馬)

「心模様」



心も様々に変化し、時の流れのようです。高校時代「石門頌」を学んだ事が前衛書を始めるきっかけになりました。その懐の大きい文字の記憶が時々甦ります。
更なる精進を重ねて参りました
いと存ります。（彩月）

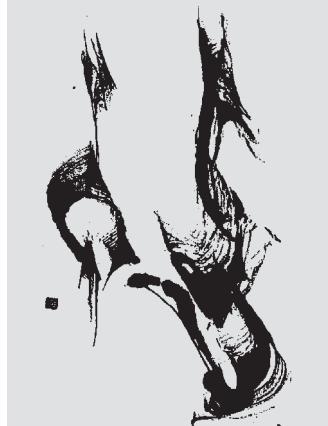
この度、審査会員にご推挙頂きありがとうございます。
いつもご指導下さる大井美津江先生、秀水會の皆様、多くの方々のご厚情に支えられてここまでこられた事に、深く感謝しております。

書が出来る「今」を大切に感謝の気持ちを忘れず、精進して参りたいと思い、作品は「精」にしました。（信子）



中村雅臣
(青森)

「暢」



「書は理屈ではない。形にとらわれず、心で書きなさい。」

これは、亡き師・田名部房香先生の教えである。
いつも、このことを胸に創作してきたが、心新たに、感動を自分の中で育て、表現できるように精進していくたい。（雅臣）

12月号でも引き続き、
新審査会員4名のご紹介をさせていただきます。





会期

平成29年10月3日(火)～10月8日(日)

会場

セントラルミュージアム銀座

アートサロン毎日

(推薦作家展会場・毎日新聞社内)

秋季展実行委員長

板垣洞仙

スクリーンに推薦作家の作品を写し、

製作意図の発表・各部選考委員の助言、

辻元大雲理事長の総括等で和やかな充

実した会であった。その後、銀座東武

ホテルで多くのご来賓をお招きして祝

70周年記念書道芸術院秋季展を「セントラルミュージアム銀座」の5階会場で開催した。企画内容は例年通りで、財団役員及び本年2月開催の第70回書道芸術院展で審査会員から選抜された作家124名、さらに審査会員候補からの公募作品の359点、208名の中から厳正な選考の結果、「秋季菊花賞」11名、「秋季俊英賞」40名、計51名の入賞作品が展示された。

ただ、漢字・かな・現代詩文書・篆刻文字・前衛書の5部門を擁する総合団体である書道芸術院として残念なことは、篆刻文字の公募者がいなかったことである。今後の篆刻文字部の活性化を期待したい。

初日には表彰式・研究会が「銀座会議室2階」にて開催された。研究会は

が1284名を数えた。



会場風景

2017年 書道芸術院秋季展公募出品集計

部	出品点数	出品人数	秋季菊花賞	秋季俊英賞	落選
漢字	138	81	4	16	61
かな	14	12	1	2	9
現代詩文書	93	56	3	11	42
前衛書	114	59	3	11	45
篆刻・刻字	0	0	0	0	0
合計	359	208	11	40	157



表彰式



推薦作家のみなさん

〈併催〉 推 薦 作 家 展

《浅利祥紫》



〈風化した風景〉

120×240cm

《九條純代》



〈鈴虫〉

33×280cm×2

《後 藤 法 明》



〈万古清風〉

160×90cm

《市 川 公 山》



〈手把免角杖……〉

良寛請公山刻

140×56cm

《谷 田 燐 篆》



〈寄靈一上人〉

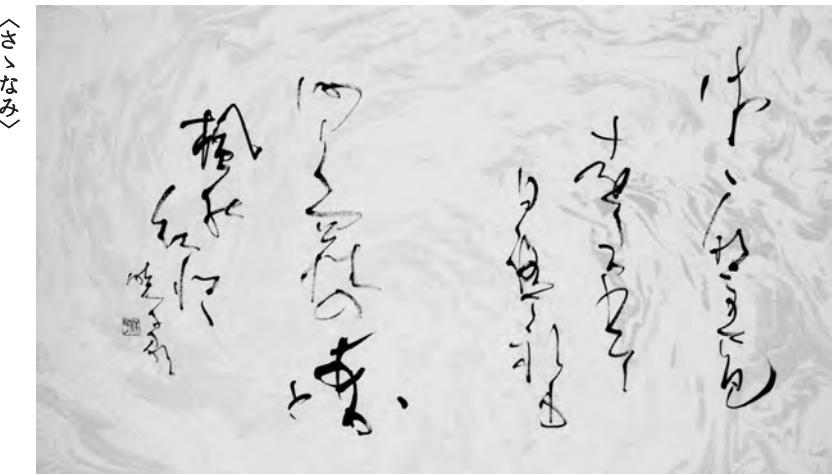
180×360cm

書道芸術院秋季展作品

理事長・常務理事・常任総務・総務・審査会員選抜



140×64cm



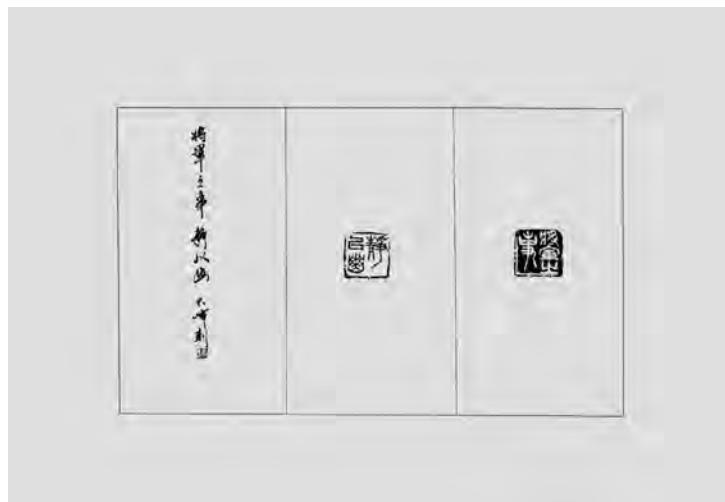
(公財) 常務理事・常任総務 下谷 洋子 63×108cm

風の中



(公財) 常務理事・常任総務 小竹石雲 59×178cm

將軍之事靜以幽



(公財) 常務理事・常任総務 後藤 大峰 70×100cm

〈「素」による〉



常任総務 大石仙岳 73×152cm

〈坦蕩蕩〉



常任総務 大内熒軒 70×147cm

〈大岡信詩より〉



常任総務 大隅晃弘 70×147cm

〈龍驤麟振〉



常任総務 赤羽蘭徑

131×48cm

〈蓬田紀枝子の句〉



常任総務 出原悦柳

180×60cm

〈熱〉

常任総務 大町青蓮



120×90cm

〈黙〉

常任総務 川村美泉



120×90cm

〈尋による〉

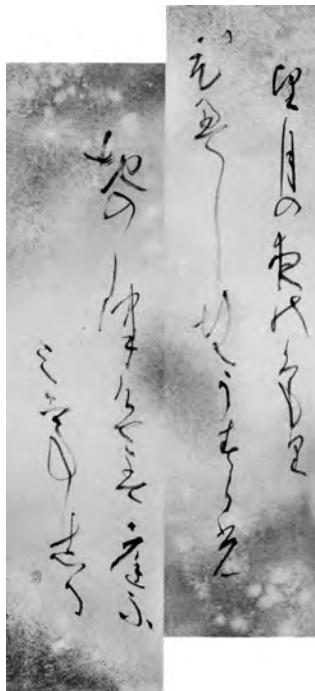
常任総務 倉林紅瑤



152×73cm

〈望月の夜〉

常任総務 奥田瑞舟



135×35cm×2

〈パルテノス〉

常任総務 工藤永翠



182×61cm

柿紅葉



常任総務 小池蹊舟 84×114cm

奈良の鹿



常任総務 佐藤希雲 53×172cm

はやぶさ



常任総務 鈴木智翠

千載一遇



常任総務 佐藤葉扇

180×60cm

常任総務 佐藤葉扇

172×55cm

緋纏の



常任総務 佐久間幸扇

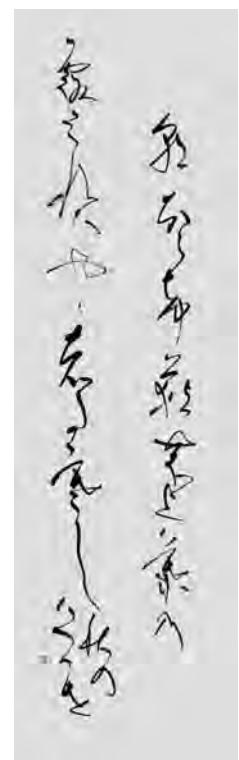
175×55cm

〈嘲〉



常任総務 東福青簾 90×120cm

〈朝ぼらけ〉



常任総務 田子白嶺

176×53cm

〈龍行虎歩〉



常任総務 中尾琴麗

175×55cm

〈送邢桂州〉



常任総務 徳岡翠江

180×53cm

〈京〉



常任総務 知野洛水

152×73cm

〈天懷如水〉



常任総務 渡辺柱雲

174×54cm

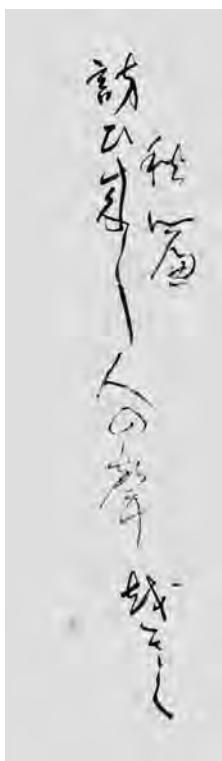
〈羽たたき〉



常任総務 柳町祥香

150×70cm

〈秋簾〉



常任総務 松村くに子

182×63cm

〈カオスの中で—10—〉



常任総務 真下京子

121×90cm

〈煌〉



常任総務 長峰万扇

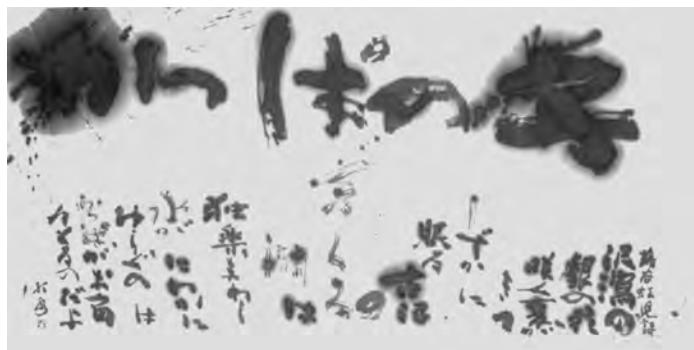
120×90cm

〈美術と回文より〉



常任総務 横田汀華 54×180cm

〈かうばの子〉



総務 岡 紅水 70×136cm

〈石川不二子の句〉



総務 天野白扇

182×61cm

〈羅や…〉



総務 阿部恵泉

146×67cm

〈耕〉



総務 阿潟浜翠燕 90×120cm

（暢）

総務 岡村 恵窓



120×90cm

（梅潤入書）

総務 大沼 樹峰



61×40cm

（正樹句）



総務 坂本 龍水

178×55cm

（朱夏）



総務 乙倉 翠芳 58×178cm

（吉田一穂の詩）



総務 加藤 紫翠 60×177cm

朱紙銀字離騷



総務 高橋 潤 42×174cm

吉井勇歌



総務 佐藤初香

175×58cm

拝



総務 辻川松月

120×90cm

いち光



総務 嵐峨翔葉

180×60cm

互



総務 朝倉希代子 91×121cm

特集：書道芸術院秋季展

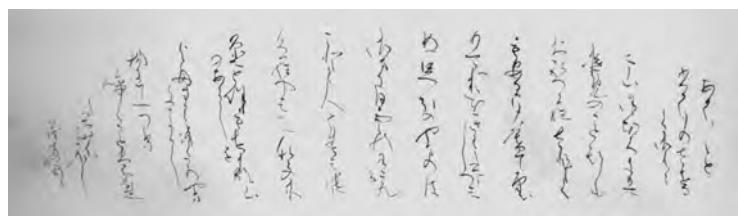
〈消夏雜詠〉



170×53cm

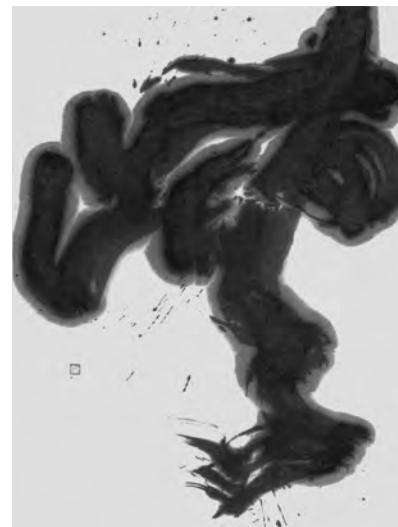
審査会員 阿部青沙

〈あはあはと〉



審査会員 岡村千恵 53×180cm

〈峠〉



総務
那須野明花

120×90cm

〈題慈恩寺塔〉



審査会員 高安翔琴

〈蒼鷺〉



審査会員 佐々木一峰 61×182cm

〈山口誓子の句〉



審査会員 新宮文葉 90×120cm

秋季菊花賞

審査会員候補

〈太子刷護経〉



今関心華

175×55cm



178×58cm

高岡秀汀

〈波々〉



清遠瑞 91×121cm

〈鳳〉



向井翠窓

121×91cm

〈晚蟬〉



新谷嵐泉 53×180cm

〈一羽立つ鶴〉



石崎甘雨 91×121cm

〈想い〉



井上恵子 91×121cm

〈波濤〉



木原尚子 89.5×120cm

〈墓〉



藤原利苑 90×120cm

〈勝太郎の詩より〉



金野翠苑 58×179cm

〈涛(なみ)〉



小此木白洋 73×152cm

書道芸術院創立70周年記念

役員作品巡回展

併催 関西總局展・玄遠社展

日韓交流書芸代表作品展

会期 平成29年9月13日(水)～18日(月)
会場 大阪市立美術館

実行委員長（関西總局長）

小 伏 小 扇

5月29日(日) 関西總局展実行委員会を開き、砂本杏花、畠中弄石先生はじめ玄遠社幹部で、関西總局展の概要を決定。

9月11日(月) 恩地春洋先生遺作を含む1538点を展示。

9月16日(土) 台風18号接近の雨の中、辻元大雲理事長、下谷洋子常務理事、後藤大峰担当常務理事、嵯峨大拙担当理事来館。

15時30分～16時30分、「辻元大雲先生による作品解説会」がはじまり、前田龍雲司会、辻元大雲先生が本部

役員の紹介、さらに院の歴史を語られた。巡回展出品者10名が、自作についての思いを話し、内容の濃い解説会となる。

17時30分から天王殿に移り、本部役員、韓国出品者と通訳、実行委員による和気藹々の歓迎会。

9月17日(日)9時30分。本部役員、実行委員がお待ちするなか、韓国出品者来館。ハングルの興味深い説明を聞いたり、記念写真を撮り合ったりと充実の時間を過す。このすぐ後、台風18号の警報が出て、10時30分閉館となつたことは、まことに残念な事柄。遠方よりお越しいただきながらご覧いただけなかつた方もあり、申し訳なく思います。

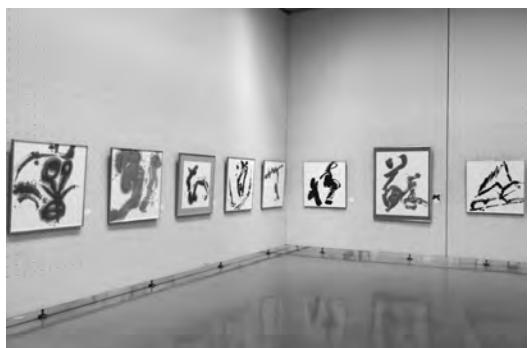
後藤大峰担当常務理事の乾杯の音頭。来賓には、毎日新聞大阪社会事業団常務理事 和田堅吾様、毎日書道会関西支部長 岡崎康次様、毎日新聞の石井明子理事、平川峰子評議員。はじめ関西の各派代表の先生方、報道関係、業者、会員合わせて130名。15時盛会裡に終了。ご協力いただきました全ての方々に感謝いたします。



財団役員作品



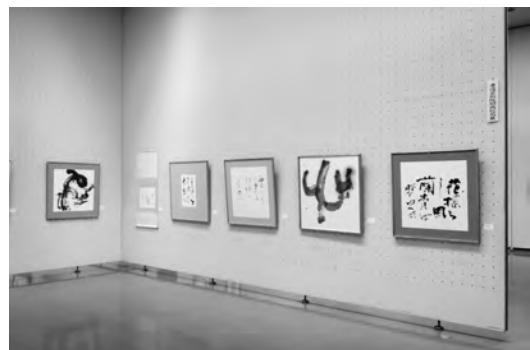
関西總局展（2）



関西總局展（1）



併催の玄遠社書展



関西総局展（3）



小伏竹村顧問による解説



財団役員による作品解説



文楽「七福神」



韓国・院幹部の先生方と



辻元大雲理事長挨拶



小伏小扇関西総局長による挨拶

初めての仕事は、唯々感謝、学びの心しかないと。

役員作品巡回展

併催 北海道支局展

会期 平成29年9月26日(火)～29日(金)

会場 ギャラリー大通美術館

実行委員長(北海道支局長)

西岡雨瑠

北の大地に70周年の歴史を誇る本展

が、錦秋を彩る札幌の地に開催された。

全国で最も北端にある極小の書仲間を
加えて頂けることは、最高の喜びであ

る。私は事前に仙台等を見学。そのよ
うを学んだ。次に、毎日新聞北海道支

社の御後援を。道内の中央で活躍する

作家の先生方にも、全て御案内。万全。

初日、私達の辻元理事長、下谷・小

竹両先生が、早朝から会場へ。温かい

掌を差しのべられ、御批正も賜わった。

「北の開拓魂が息づくね。少數乍らよ
く頑張る。」など。新・毎は書道会専務

理事さまも。会期が、北の毎日展と重
なり、幸いして一日100名を超える、僅か

来場の人は、「北にない傑作拝見。
凄い意気、伝統の大切さを感じた。」
と。

初日夜、市内随一の名店で、毎日展

最高顧問の中野北溟先生をはじめ、今
年度の「毎日展北海道展」の実行委員

長・小原道城先生の御臨席を頂いた。

「ようこそ」と。(これは昭和47年札
幌冬季オリンピックの合ことばである。)

はじめに、主催者の辻元大雲理事長

から御挨拶を頂戴。「北は実によい。

少数ながらよくまとまっている。また、
作品も。本日は天下の書家、毎日展最

高顧問の中野北溟先生、また、本年度

の重責をになう毎日展北海道展実行委

員長の御来臨を頂き、心より御礼申し

上げます。北の地に頑張る皆様に敬意

を表します。」と。北溟先生は、「何し

ろ、この人々は仲良し、それが一番。
よくやっている。」と。小原先生は、

「北には、厳しい寒さに立つ強さが一
番。」と。私はここで「趣意書」の力

を思い出す。和気充満の宴だった。

また、遠く本州より、御来道の方々
へも感謝し、4日間の責務を終えた。



大きな花束を前に役員作が



ギャラリー玄関前で



巡回展作の大星群が



巡回展作は悠々と



巡回作の力光る



50数点も夫々特色を



一点一作、魂は芸術と



北にはない院の芸術が



西岡をはさみ、辻元先生・小竹先生が



「額と軸」が相互に和す



北の巨頭 中野先生を囲み懇親の宴で



下谷先生・雨城先生、右に辻元先生と西岡

伊都内親王願文（平安・伝橘逸勢）

②

漢字研究部臨書課題

＝（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）

当該古典の左記掲載部分以外も可。

才具四難 持成

六畜門閥 あわ志裏

康睦遷 内體謝産

端承昇 物志菴舟

宮内庁保管

(掲載図版65%縮小)

※落款を必ず入れる。
署名、もしくは○○臨
(押印のみも可)

〈解説〉伊都内親王願文の書においては、元来謹嚴端正に書かれるべき願文が、楷行草の各体を用い、氣宇雄大、自由奔放な運筆によって書かれ高い格調を見せており。また、俯仰法が巧みに駆使され、まさに毛筆の機能が最大限に発揮された名筆である。

なお、卷末の「伊都」の2字は本文と書風を異にして、小さくつましく書かれていることから内親王の自署と思われる。また、本文の25箇所の朱の手印も願意を強調すべく捺した内親王自身のものと推定される。

料紙は楮紙。縦29.6cm、長さ34.8cmの巻子本（全67行、534字）である。

等、才真三四井、徳成二、六芸、門閣安和、表裏、康睦、遂乃体謝、三塵、端、形昇、物表、慈舟

(編集部)

古筆鑑賞

164

一条摂政集(さざなぎしゆう)

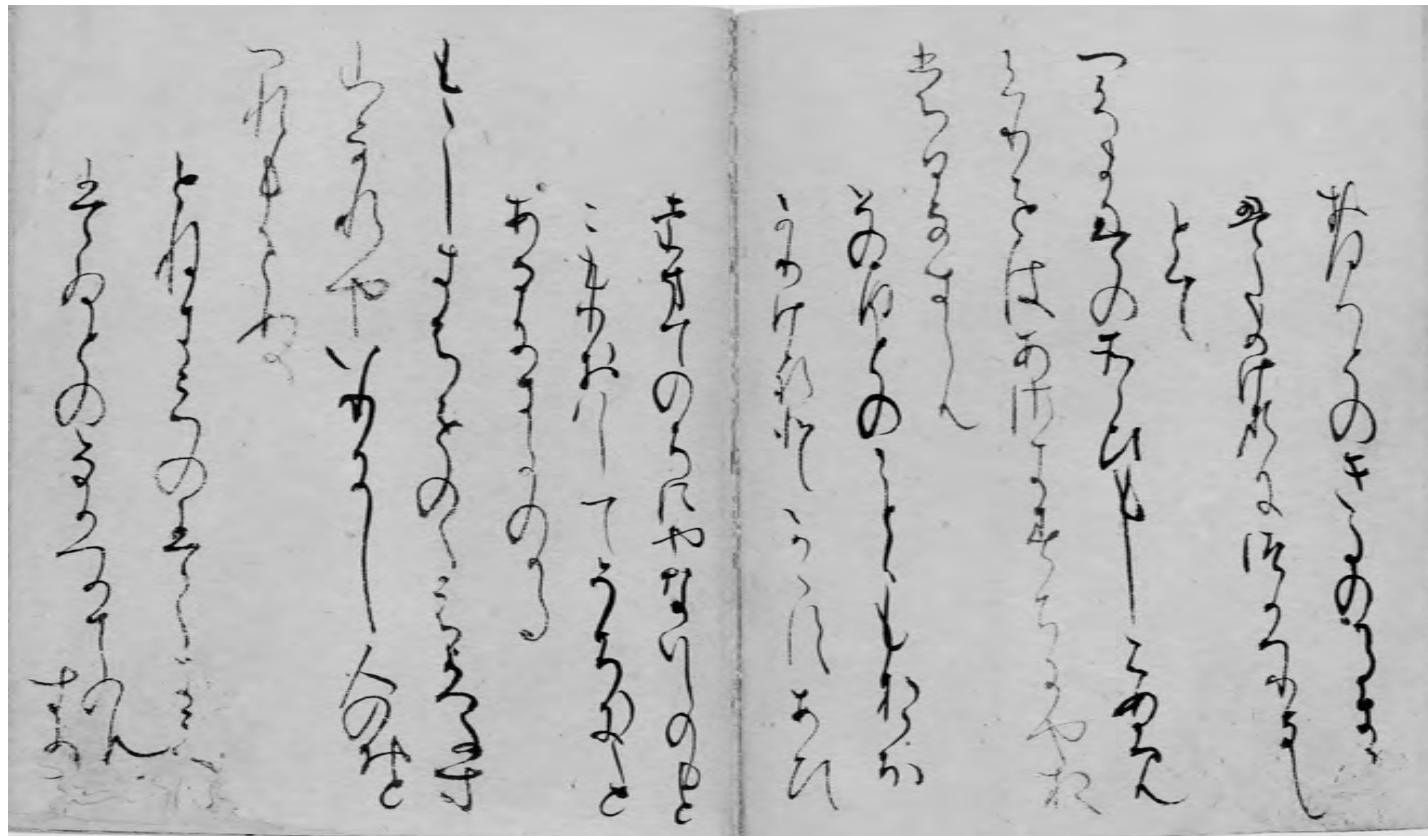
②

*落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

かな研究部 臨書課題

(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)
別紙を裁断して貼付も可。半懷紙は半紙サイズに切って使用のこと。
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

II (毎日展公募サイズ以内・縦横自由)
左記の掲載以外も可。



(個人蔵)

〈解説〉 一条摂政集は、藤原定家の所持本であったため、定家の集付けおよび書き入れがある(手澤本と
いう)。和歌の上部に書かれている
集付けの「撰」「拾」「新」「勅」は
「後撰集」「拾遺集」「新古今集」「新勅撰集」に採入されている歌
であることを示している。

料紙は薄手の楮紙が使われてい
る。その書は連綿が美しく、速筆
で、気取りがなく自然な美を展開
している。素直で滑らかな線、行
の傾きによって生じる空間、一行
の中での疎密、律動の変化などが
絶妙に調和した古筆である。

(編集部)

*掲載図版は85%縮小。
*古筆は原寸(以上も可)で臨
書しましょう。

よみ
おほむとの、きたのかたきこ
えたまけるに、御かへりなし
とて
つくまえのそこひもしらぬみ
くりをばあさきすぢにやお
もひなすらむ
そのほどのことどもおほ
かりけれど、かづ、あひ
あるに、きたのかた
山なれやいりにし人のおと
こもりおはして、うちに／＼と
もしきはをのゝえたす
とねぎみのはゝぎみ
はるどの、なかつかさのむ
すめ

習い方解説 (二)

最首翠風

鶴聲秋更高
(許渾)
(鶴聲秋更に高し)

鶴の鳴く声と共に秋天はいよいよ高く澄む——の意です。5字句ですから紙面に流れを作ることが出来ます。バランス良く文字を置く工夫をし、余白の美も考えたいところです。

かつては文字のみに着目する手習いが全てでしたが、戦後は書を芸術として捉える見方が生まれ、紙面全体の美を考えるようになりました。「字配り」という言葉の代りに「紙面構成」と称するようになつたのです。紙面構成を考える場合、文字の大きさのみでなく含墨量(潤滑)や筆の開閉による線の質、変化が求められます。その為には筆の種類や紙質が係つて来るでしょう。半紙の裏面を使うという選択肢のあることを私は高校時代に知り表現の幅が広がりました。

鶴聲秋更高 よみ(鶴聲秋更に高し)

書体=自由



漢字規定秀級以下【十一月十日締めきり】用紙半紙普通判

千葉蒼玄選書

習い方解説 (二)

千葉蒼玄

月白風清
(月白く風清し)
(蘇東坡)

秋の月が夜空に煌々と白く輝
き風も気持ちよく吹いている。

唐の三大家の正座するような楷
書に対し、顔真卿は堂々として他
を圧倒する風格がある。顔法と呼
ばれる用筆で、縦画は大講堂を支
える柱、エンタシスに良くなとえ
られる。この造形は好き嫌いが分
かるところであるが、現在私た
ちが目にしている明朝体はこの顔

真卿の楷書を基にしていると言わ
れる。よく見ると縦画の跳ねなど
は顔法そのものである。



書体＝楷書



顔真卿 顔勤礼碑

かな規定 初段以上【十一月十日締めきり】用紙 半紙普通判(料紙可)

平川峰子選書

習い方解説 (二)

平川峰子

心なき身にもあはれはしられけり
鳴立つ澤の秋の夕暮
(新古今和歌集・西行法師)

かな作品は、墨の潤渴に気を配り、墨継ぎをどこでするか考えます。あとは行頭・行尾の位置、行間に気をつけましょう。この場合は3行目と4行目を広くしました。

出家僧である私の身にも鳴が飛び立つ水辺の秋の夕暮れがものさびしく感じられる

創作

よみ方 心なき(支)身に(耳)も(毛)あは(者)れ(連)は(盤)しらけれ(希)り
鳴立つ澤の秋の(農)夕暮

よみ方 心なき(支)身に(耳)も(毛)あは(者)れ(連)は(盤)しらけれ(希)り
鳴立つ澤の秋の(農)夕暮

かな規定 秀級以下

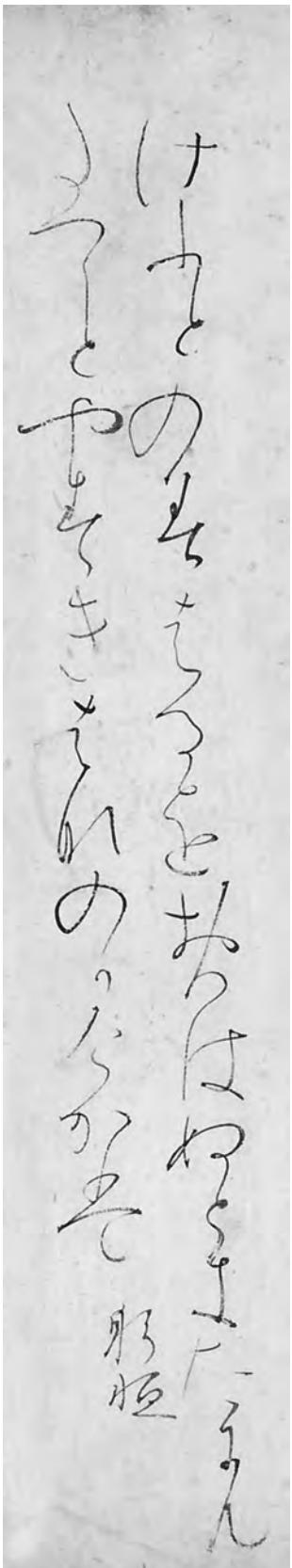
【十二月十日締めきり】

用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

◎四月号より課題を「粘葉本和漢朗詠集」に変更いたしました。

掲載写真の和歌を臨書する。または部分(2字以上の連綿)を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
(掲載写真拡大111%)



よみ方 けふとのみ(美)は(者)るをおも(元)はぬとき(支)だに(尔)も(元)
た(多)つことやす(春)きは(者)な(那)のか(可)げ(介)かは(盤) 躬恒

習い方解説 (二)

木村 東舟

久方の天の時雨の道いそぐ
おく山道をうらさびにけり

(伊藤左千夫)

行の長さの短い横作品は、揺れ

を出しにくいのが難しい所です。

墨が多く強い表現から、柔らかく優しい、心に残る作品を目指して、今回茶墨で書いてみました。
墨液で書いた作品は特に渴筆が美しいありません。必ず墨を磨って書きましょう。

線質が堅くなり過ぎぬために、手足を常に自由に動かせるよう、

訓練をしておきたいのですね。

*ヨコ形式に限る

創作



出品券
貼付位置

名 越 蒼 竹



折戟沈沙鐵半銷
(折戟沙に沈んで、鐵半ば銷す。
自ら磨洗を將て前朝を認む。)

書体=自由



明窓試墨吐秀潤
(明窓墨を試みて秀潤を吐く)
(張末)

漢字条幅規定 秀級以下 [十二月十日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

大平邑峰選書

習い方解説 (二)

大 平 邑 峰

今回は、北魏・鄭道昭の書を参考にしました。古典から集字をして習います。慣れてきたら自分なりのリズムで書き通します。円筆による大らかで粘りのある線をめざしてください。表現に適した用具・書く速さなど色々工夫してみてください。

2回目は北魏風楷書で試みました。隸書体の影響を残し、横画を強くする特徴があります。また起筆の強さ、転折部の特徴等を表現したいのです。唐風楷書は多数字作品に、北魏風楷書は少数字作品に適しているようです。また北魏風楷書は点画が太いため、字間行間の余白を少なくしても字座の干渉が起きにくいと思います。
※タテ形式に限る

習い方解説(二)

北村白琉

日は今日は小さな天の銀盤で
雲がその面を

どんどん侵してかけてゐる

吹雪も光りだしたので

太市は毛布の赤いズボンをはいた

宮澤賢治「日輪と太市」より 白琉書

前回に続き、宮澤賢治の詩より題材を選びました。春先の北国の情景が素直で温かな目でスケッチされていて、好きな詩の一つです。

ペン字を習う時に、特に初心の方に気をつけてほしいことは毛筆の場合と同様に、書く姿勢が一番大切です。椅子に深めに腰かけて、背筋を真っ直ぐに伸ばし、左肘は机上につけずに、手の平で軽く紙面を押さえます。肘まで机につけると、上半身が左へ傾いてしまいます。

目と紙面の間は20~30センチくらい離した方がよいでしょう。

※落款(自分の名前)を必ず入れる。

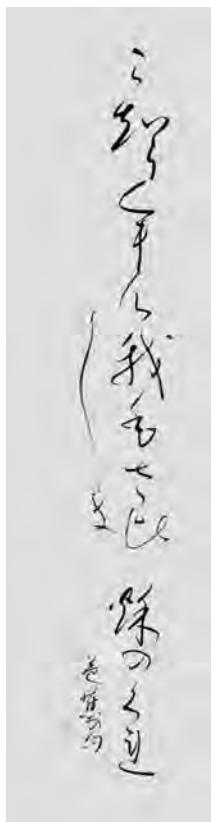
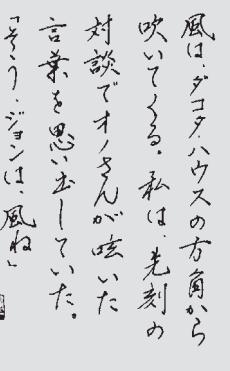
用紙=はがきの大きさ(14×10cm)、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

今月の

ホープ作品 各部総評

No. 677



漢字条幅部 師範 真下美佐代
かな条幅部 師範 真下美佐代

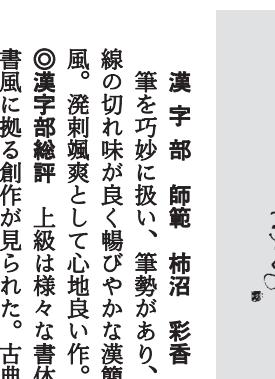
◎漢字条幅部総評 参考手本のみを頼ると誤字が生じ易い。必ず文字を確認し頭にたたき込むことだらう。

(翠風評)



ペン字部 師範 勝 鳳晶
古典の学習を生かし、文字の造形と余白の生かし方が見事、曲線と直線の調和も良い。

◎ペン字部総評 適したペンを選んでください。
(鄭雲評)



現代詩文書部 特選 菊地 慶輝
長峰羊毛筆の特徴を良く生かし、細線の中に抑揚があり、柔剛を備えている。構成も懐が広く見事。

◎現代詩文書部総評 漢字・かなの基礎が出来ていない作品が多く見られるのは残念!!
(梓江評)

前衛書部 特選 高原 梨秀
斬新性に富み、その原動力を余白と運筆のリズムに求めて工夫を凝らした造形は魅了に値する。

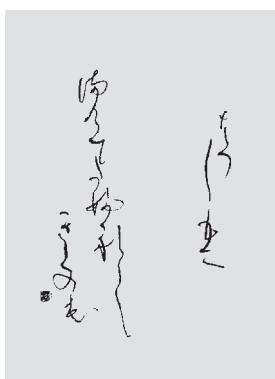
◎前衛書部総評 創意の向上は感じたが、上位に淡墨作品を推せずにこれは残念。再挑戦願います。(藍素真評)

かな部 師範 片岡 照徳
穏やかで温厚な筆致が自然なり
ズムで流れている。布置も良く、
明るく爽やかな作品です。
◎かな部総評 紙面に對してバラ
ンスの悪い作品が有りました。俳
句の時、太目の筆を使うと良いで
しょう。
(多希子評)



漢字部 師範 棚沼 彩香
筆を巧妙に扱い、筆勢があり、線の切れ味が良く暢びやかな漢簡風。潑刺颯爽として心地良い作。

◎漢字部総評 上級は様々な書体の着実な学習を基礎に、広い視野での創作に期待する。
(萬城評)



抑制のきいた構成、筆致で余白が効果的で古典美さえ漂う。落款の字も印も絶妙な場を得て見事です。

◎かな条幅部総評 暖昧な書過大な我的散見は残念。他は全般に高レベルでした。更には、31字と17字の差の認識を望む。(明子評)

今月の 特別研究部優秀作品（特選）

漢字 (もくせい)

森田藤谷



森田藤谷書

憶昔

くせい)

◆墓誌銘らしい安定感のある造型で、気力が貫通している。墨量の多い字は緊張がやや欠けるか。
(翠風評)

◆古典の特徴を良く捉えた一貫性のある作品。やや扁平の字形だと更に余白が生きるか?臨書態度敬服。
◆美人董氏墓誌銘の特徴をよく捉えている。持続の精神力に敬服。升目にに対する字粒の大きさ
程良い。
(東舟評)
(和楓評)

叶敬く書形貫

佐藤希雲
美人姓董汴州人也粗佛子齋涼州刺史教仁精治講學鄉間父後進仲儉英雄聰馳評流美人體質閑華天情婉德恭以接上順以承親含華吐艷麗華風采砌納理璫連芳蘭蕙曉而未儀華殿古車讓臺接珠珥於芳林柱綺縕於春景拔臺工鶴翥之巧彈幕窮巾角之妙妓客傾國冶咲千金在庭池蓮鏡澄空月態轉腮眸之絕香觀鬼矯之風颯瀟姿逸吹花霓霞以開皇十七年二月感疾至七月十四日戊子終于仁壽宮山第春秋一十有九歲竟無終於秦賢者君靈附美人董氏墓誌銘希雲題

132×45cm

「美人董氏墓誌銘」

臨書
(大雲)
佐藤希雲

部分拡大

美人姓董汴州恆
鄉間父後進佛僅
接上順以承親舍
儀魯殿出事梁臺

佐藤希雲臨

(八戸) 市川紫泉

180×60cm

◆毫筆で切れ味よく明るい作品。2行目中央部にも見せ場が欲しかった。

◆自由自在に変化する筆触が絶妙。部分により筆圧ぬき過ぎの感もあり。筆力十分で頼もしい。

現代詩文書

卷之三

市川紫泉書

◆文字造形に工夫を凝らし、変幻自在な筆致から生まれるリズムが心地よい。白を活かした構成が趣として来る。舞ひの「ひ」は軽くしたかった。一首の収め方見事。(翠風評)

◆「一」の字で意表を突く。文字の大小・潤渴、9行の構成が見事鶴が佇む湿原の情景が脳裡に浮かぶ。

「武田弘之の歌」

前衛書



坂井初江書

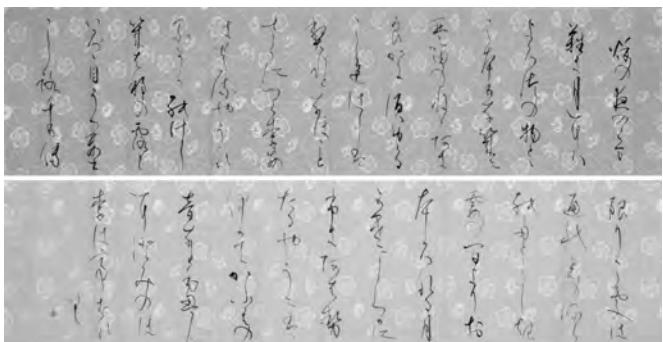
144×59cm

◆濃墨による筆力が充実し、上部から下部への流れ・リズムが見事。何より余白が美しく作品をより効果的にした。(紅瑠評)
◆「炬」のイメージから連想するエネルギーを感じる。二つの集団相互の呼応も見事である。(翠風評)

◆濃墨で大きく動くパワーが見事。中央より右下へと落す墨痕で、左下の余白が生きています。
（和楓評）
(東舟評)

幕張	英峰	千葉	うる	白珠
高橋	「かな」	佐藤	菅原	高原
千葉	「かな」	桂香	房江	梨秀
飯田	賢雲	笛舟	湖秋	朱鳳
高橋	光彩	舟	田子	惠琉

か な (A I) 藤 村 昌 子 「秋の夜の」



藤村昌子書

73×149cm

◆色鮮やかな料紙機2段によく鍛練された線が穏やかで柔軟なリズムを醸し、さわやかな紙面を生んでいる

(紅瑠評)

◆梅柄が映える2色の料紙間に、淡々と書き進む。字間に疎密の変化があれば更に良いと思う。(東舟評)

秋山之扇



秋山之扇書

58×180cm

◆中央を引き立てるための助走あり次第に本腰に。大小、太細を織り交ぜ力強い筆致で効果生む。 (東舟評)

秋桜	加美	木本	小川	霜華	現代詩	松延	桂月	「かな」	A 千葉
うる	かみ	もと	おがた	くわ	じだいし	テノ	カイ	トシ	アキハ
秋	桜	木	川	霜	詩	藤原	平野	草堂	葉
さ	ざくら	き	かわ	くわ	し	ふじわら	ひらの	くさどう	は
秋	秋	木	木	霜	詩	藤原	平野	草堂	葉

◆導入部の集団に期待を持たせ、後半に思い切り詩情を盛り込んだ。一貫性のある直線的な強い線質で。（翠風評）

(創作の部)

總出品點數
81 点

英幕千峰張葉「かな」	「英峰千葉」 〔漢字〕	白青蓮花「うらん」	白珠信美「しゆみ」	大秋加前衛「かうぜい」	抽櫻美「ひきざく」	松現代「じげんだい」	桂「かな」	月「がつ」	八街「はちがい」	千葉「せんぱい」	漢字「かんじ」	創作の部	81点	総出品点数	52点	創作の部
吉高瀬橋田	「佐藤原渡辺野」 〔臨書の部〕	「田子の部」	伊藤浦原「いとう」	畠木中村「はたけ」	小川原「こがわ」	篠原藤原「しのはら」	三枝子「みえり」	平野伊澤「ひらの」	香雨香山「こう」	白柳華山「しらや」	叙舟「じゆふ」	舟堂「ふうどう」	漢字「かんじ」	前漢字「ぜんかんじ」	前漢字「ぜんかんじ」	漢字「かんじ」
彩賢光雨雲彩「うめうめ」	「桂房秋笛香江湖舟」 〔漢字〕															
英幕千峰張葉「かな」	「英峰千葉」 〔漢字〕	白青蓮花「うらん」	白珠信美「しゆみ」	大秋加前衛「かうぜい」	抽櫻美「ひきざく」	松現代「じげんだい」	桂「かな」	月「がつ」	八街「はちがい」	千葉「せんぱい」	漢字「かんじ」	創作の部	81点	総出品点数	52点	創作の部
英幕千峰張葉「かな」	「英峰千葉」 〔漢字〕	白青蓮花「うらん」	白珠信美「しゆみ」	大秋加前衛「かうぜい」	抽櫻美「ひきざく」	松現代「じげんだい」	桂「かな」	月「がつ」	八街「はちがい」	千葉「せんぱい」	漢字「かんじ」	創作の部	81点	総出品点数	52点	創作の部

漢字研究部
(美人董氏墓誌銘)

選評 稻 埤 小 藏

今月のホープ作品



吉田東空

◎漢字研究部總評

この原帖は明確であり臨書学習には適しています。今回は特徴をよく捉え字形、線質な

ど着実な作が多くありました。一方、もう少し寧な学書が望まれる作も多數ありました。臨書するにあたっては、筆を執る前に丁寧に観察する姿勢を養ってください。そうすれば、その形から用筆を感じることができます。自分自身で見付け納得することが書の上達へとつながります。

依和麗ひ奈慶
か緒
未恵子る子子

京菊彩節沙直

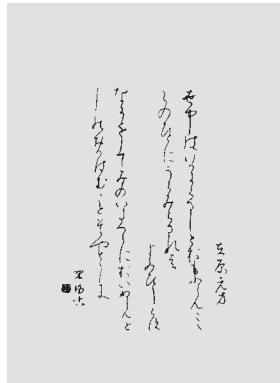
明日夏紀波代心風

亞觀清 心友
希舟耀 翔香里

か な 研 究 部
(高野切第三種)

選評 庄 司 紅 郷

今月のホープ作品



加藤翠陽

かな研究部 特選 加藤 翠陽
連綿のリズムをしっかりと捉え、穩やかで、流麗な線質で表現出来ました。和様の漢字もしっかりと溶け込んで、美しい第三種の作品です。

◎かな研究部総評

原本を忠実に見ようとするとあまり、流れが途切れたり、行間や字間に間違いの作品があります。全体を観察する力を養って下さい。文字は正しく書いていました。

かな研究部成績表